学園だより
太白山

（令和7年第1・2合併号）

宮城県さわらび学園
〒982-0215
仙台市太白区旗立二丁目４番１号
TEL：022-245-0333
FAX：022-245-0515
https://www.pref.miyagi.jp/sishiki/sawarabi/
学園ホームページもご覧ください

『みんながいてくれてよかった』　園長　田中　佳二

長い、長い暑い夏が終わり、気がつけば今年度も後半。一気に秋の空気に入れ替わり、気が付けば今年もあと2カ月となりました。さまざまな事情から、今回が「太白山」第1号の発行となりました。遅まきながら、日頃より学園の運営、子ども達の生活に多くの御支援をいただきましてありがとうございます。

今年度のここまでを振り返りますと、1日1日の日常の生活の中にも、そして、男子の東北・北海道地区野球大会での優勝、8月には沖縄県で開催された全国野球大会への出場、女子の南三県交流会（通称：FASカップ、福島県、山形県との三県の施設交流会）でのバドミントン大会での活躍などなど、子ども達と職員のつながりの中で多くの思い出がよみがえってきます。野球大会後に書いた子ども達の作文にこんな一節がありました。『本当にいい、さいごの全国大会でした。ほんと、「みんながいてくれてよかったな」と思いました。負けてしまったけど楽しかったし、もっと野球をしたいなと思いました』と。学園生活は子ども達、職員での集団生活です。「みんながいてくれてよかった」と思えることが、子ども達、職員の気持ちの中にもあることがとても大切であると感じています。今年度後半もさまざまな場面があると思います。きっとそれが楽しいことばかりではないと思いますが、みんなで力を出し合って、学園で過ごした日々がしっかり記憶となり、ひとり一人の底力にもつながっていくことを願って頑張っていきたいと思います。引き続きのご支援、ご協力をお願いいたします。






自分の花を咲かせよう

仙台市立人来田小中学校旗立分教室　　教頭　堀部　隆

毎週月曜日、子供たちとさわらび学園の先生方、そして旗立分教室の先生方が体育館に集い、朝会が行われる。その中で園長先生、副園長先生と交代で私が話をする機会をいただいている。私はその場で子供たちに『自分の花を咲かせよう』という言葉を継続して話している。

私は中学生のとき剣道部に入部した。すばらしい顧問の先生に出会えたこともあり、我々の代は「全員初心者から剣道を始めても、東北大会に出場できることを証明しよう」という高い目標を掲げた。そのため、一年間で休みは二日間のみ、放課後以外にも、朝練習や夜練習で汗を流していた。身体が強かった私は一日も休まずに練習を続け、二年生の後半には県内の強豪選手とも肩を並べるくらいまで上達していた。当時、あまり背が高くなかった私は長身の選手になかなか勝てなかった時期があり、顧問の先生に相談したことがあった。先生は私に「剣道では単に身長が高い選手が有利だと言うわけではない。身長が高くて有利な面もあるがその逆もある。自分の鍛錬次第で、間合い、スピード、打突の機会、技の選択まで、自分の特徴がそのまま特長になる。自分の剣道を見つけてみなさい。」と話をしてくれた。私は先生の言葉を何度も自分に言い聞かせ、自分なりに工夫して練習に臨んだ。その後も部員全員が顧問の先生を信じて練習を続け、最後の中総体では宮城県大会で準優勝し、目標であった東北大会出場を果たすことができた。

その後、自ら教員となり、剣道部の顧問として指導する立場になってからは、自分がそうであったように「初心者から剣道を始めても、素直に一生懸命努力すれば夢は必ず叶う」ことを子供たちに話してきた。常に子供と一緒に汗を流し、夢中になって指導することで、子供たちは東北、全国大会を普通に口に出せるまでに強くなっていった。そんなとき、十二月に兵庫県で行われた若鷲旗剣道大会という全国大会に参加する機会をいただいた。その際、大会会長の先生からいただいた言葉がある。その言葉こそが『自分の花を咲かせよう』なのだ。指導者となった後に出会ったこの言葉を聞き、中学生の頃に顧問の先生に話していただいた言葉と重ねることができた。それ以降、私は常に子供たちにこの言葉を話すようにしている。「人には一人一人に花がある。その花は形、大きさ、そして色までもが全く異なる花である。人が花を見てきれいだと思うのは、初めからある色や形に対してではなく、その花自身が精一杯きれいに見せようと努力し、輝いているときにその姿を美しいと感じるのである。」と。

『自分の花を咲かせる』ことこそが人が生きる意味であり、追い求めていくものであると私は思う。これからも皆が自分自身を大切にし、自分にしかない自分だけの花をきれいに咲かせてほしいと願っている。



各寮紹介
～各寮長より～



今年度の広瀬寮は、児童3名、寮職員は転入職員2名を迎えてのスタートとなりました。新しい職員を迎えた中、4月に早速2名の入所があり、バタバタだったことを記憶しています。その後、2名の入所があり、10月1日現在では、児童7名での生活になっています。

今年度の広瀬寮のスローガンは4つあり、児童、職員の意見を合わせて作成したものになります。

①生活の基本を大事にしよう（あいさつ、返事、言葉遣い）。
②日課に対して、真剣に取り組むべき時は真剣に取り組み、楽しむときは思いやりを持って楽しもう。
③自分で考えて行動しよう（時間の切りかえ、気づいたことは行動へ）。
④ありがとう、ごめんなさいを素直に言い合い、皆で励まし合おう

今年度に入り、時に笑顔で児童と職員が一緒に遊んだり、時に児童と職員間で考えをぶつけ合ったり、職員間でも支援に対して意見交換を行っています。児童一人ひとりに合った成長を促せるよう、今後もみんなで頑張っていきたいと思います。（広瀬寮長　見立屋　航希）

今年度も「優しい青葉寮」とのテーマのもと生活しています。具体の行動目標を子どもで話し合い、「優しい言葉遣い」「すばやく行動する」「相手の気持ちを思って行動する」と決めています。子どもたちで意見を出し合い、決めることができたことがまず何より評価できることであり、個性的ながらもかわいげのある優しい子たちが揃っていると感じています。もちろん日々の集団生活の中で、色々なことが起こり、時にぶつかりが合うこともあります。振り返る作業は時に心のエネルギーを沢山要するものです。振り返りたくないことがあったり、振り返ると辛くなることもあるかもしれません。ただ振り返ることから逃げずに向き合おうとする子ども、そこに寄り添いながらも突きつけるチームワークある寮職員、という風土が青葉寮にあると思っています。もちろん集団や組織は生き物であり、刻々と状況は変わると思います。しかし今の子どもたちと職員で作り上げている良いものを文化として定着させ、より発展的なものとし、一人ひとりのこれからの幸せにつなげていけたらと考えています。
（青葉寮長　日下　善貴）

令和7年度も早いもので半年が過ぎようとしています。そして私も寮長になって3年目。1年ごと、一緒に生活する子どもたちによって、また、職員によってもその年の雰囲気やカラーは違い、違って当たり前と思いつつも、日々奮闘しながら過ごしてきたのは変わりないな、と感じている今日この頃です。そして、この原稿を書くにあたり、去年、一昨年の原稿を振り返りました。例年、人数にそう大きな差はないけれど、子どもたちを表現するのに一番適している“個性あふれる”は、定番ワードになっていました。もちろん今年も“個性あふれる”子どもたちですが、去年に引き続き、職員も個性的な先生が多いため、個性的×2でなかなか刺激的です。

「みんな、先生たちが大好きです。独占欲が勝ってしまう子もいますが、たくさんの甘えを適切に出しながら、受け止めてもらえる経験を積み、また、失敗から学んでいく･･･そんな繰り返しの中で少しずつ力をつけているところです。」昨年度の原稿からの抜粋です。今年度も変わらず続けていることです。トライアンドエラーを繰り返しながら、少しずつ階段を上っていく。刺激的な生活の中でも、地道に着実に上っていることに気づけるような支援を私たちも続けていきたいと思っています。
（すみれ寮長　菅原　美佐子）

東北・北海道地区野球大会
第67回全国少年野球大会



令和7年6月27～29日、岩手県花巻市で東北北海道地区少年野球大会が、令和7年8月27～29日、沖縄県宜野湾市で第67回全国少年野球大会が開催されました。関係各位の皆様、熱いご声援・ご支援ありがとうございました。

令和7年度のさわらび学園野球部は6人で活動を始めました。児童全員が野球未経験者で構成され、6人という少人数ではありましたが、昨年度の地区大会の決勝戦敗北を糧に一生懸命に練習する子どもたちでした。児童の参加人数が7人に満たないチームはオープン参加となり、試合に勝利しても勝ち上がることはできない規定となっていました。そのため、練習を続けていても職員や子どもの心から「俺たちは正式な参加は出来るんだろうか？」という疑問は消えませんでした。そんな中、4月、5月に新たな仲間が入所し、最終的には地区大会までに4人の子どもたちが加入しました。この4人も野球経験者は1人もいませんでした。

今年度のチームの強みは「素直さ」と「優しさ」です。練習が厳しくなっても、苦しい状況になっても、仲間や職員の声を信じて頑張ってくれる子どもたちでした。また、子どもたち同士で支えあい、野球を始めたばかりの仲間に対しても責めるようなことはしませんでした。技術面や精神面で何度も壁にぶつかりながら、それでも壁を乗り越え、優しく強いチームになっていきました。

そして迎えた地区野球大会。結果は去年の雪辱を果たす、優勝の成績を残すことが出来ました。決勝戦の相手は地区大会3連覇をかける大沼学園。さわらび学園が昨年度惜敗したとても強いチームです。決勝戦前には職員も含めて円陣を組み、「青い準優勝旗を赤い優勝旗に変えよう！」と主将がチームを鼓舞し、試合が始まりました。点の取り合いになり、追いつかれる場面もありましたが子どもたち全員が支えあいながらチーム一丸となり試合に取り組み続けました。優勝後のミーティングでは、子どもたち一人ひとりからチームへの感謝の言葉が聞かれ、優勝という成績以上に人間としての成長に感動する大会になりました。

地区大会後は全国大会に向けて練習を重ねました。夏の暑さに負けず、以前にもまして熱心に練習に取り組み続けました。優勝し自信がついたからこそ、以前は見られなかった児童間の衝突や摩擦が発生することもありました。しかし、その都度ミーティングを行い、チームとしての目標を確かめ合いました。そして迎えた沖縄県での全国大会。東北を出た経験のない児童もおり、多くの児童にとって感動の多い沖縄の地でした。そんな全国大会の結果は阿武山学園に14－0という完敗で終わりました。試合の結果は悔しいものでしたが、試合途中の児童は、全員が諦めることなく試合に取り組み、笑顔が多く見られる大会となりました。試合中の表情を裏付けるように、試合後のミーティングでは、後悔や悔しさを口にする児童よりも、「やりきった」、「楽しかった」と話し、チームへ感謝する言葉が多く聞かれました。

今年度の野球活動では「優勝」と「完敗」の相反する2つの経験が児童一人ひとりに「自信」と「客観視する力」の2つの大きな学びを与えたと思います。そして、児童一人ひとりの人間としての成長が野球に関係した職員以外にも大きな感動を与えたと思います。これまでの野球活動を応援してくださった多くの皆様に感謝すると共に大きな成長を見せてくれた児童に感謝したいと思います。（記：監督　永沢　陽）



第67回全国少年野球大会 児童作文



全国大会を振り返って　中学3年S.A

初めに、令和7年8月27日から29日にかけて沖縄で、野球をできたことに感謝します。

沖縄での全国大会を振り返り、自分の中で振り返りたいことが三つあります。

一つ目が、児自立の大会だからといって、全国を少し甘く見ていた自分についてです。28日の阿武山戦、自分たちは東北の王者として大会に乗り込みましたが、阿武山の選手がけいけん者並みに上手く、自分たち、東北の王者でも、勝てなかった。東北を優勝したからといって、勝てるわけではないんだなと思いました。

二つ目は、練習量と技術の差です。対阿武山戦、戦ってみて、思ったことは圧倒的な技術量と練習量の差です。特にキャッチャーです。初回1番で打席に入り、フォアボールで出塁、一球目、二球目はようす見で一塁にいましたが、三球目で盗塁、結果は失敗でした。地区大会では刺されることがなかった自分の足の速さでも、刺されたことに悔しい気持ちになりました。阿武山のキャッチャーは捕球する前からすぐ投げることのできるキャッチングをしていました。単純に、上手いなと思いました。どれだけ、練習をしてきたのかも、分かるぐらい、型にはまった、きれいな野球をさせてもらい、嬉しかったし、楽しかったです。阿武山を尊敬することができました。そんな、阿武山でも準々決勝は千葉の生実に負けてしまいました。とても楽しく見れました。試合をしてみて、実際に負けて、かんとくに練習時間を増やしてほしいとお願いもしました。それでも、もう一回が無いのが、全国です。いいけいけんをすることができました。

三つ目は生活力の高さです。技術の面でもそうですが、たった3日でしたが、阿武山の児童が、どれだけ生活を頑張っているのかもわかる貴重な三日間でした。阿武山の生活の高さその一、あいさつのすごさ、ぼろぼろとしゃべらずきちんとはっきりあいさつをしていて気持ちよかったし、自分もちゃんとしようと思うことができました。二つ目が、チームの士気の高さ、野球でみんなで協力できるということは日頃から対人関係や相手へのリスペクトがちゃんとしているんだなと思うことができました。

最後に、沖縄大会自分たち3年生の代は大阪に14－0と完敗でした。自分たち3年生とってはFASカップが最後の大会です。次の地区は新しい世代に引きつぐとともに、最後の大会FASに向けて練習を引き続き頑張っていこうと思います。引き続きご支援よろしくお願いします。

転入職員から

今年度4月にさわらび学園に初めて赴任しました2名の職員を紹介いたします。

今年度からすみれ寮に配属になりました。佐々木と申します。5年ほど他の福祉業務に従事し、今回指導員として初めて勤務をしています。

年度当初は、毎日分からないことだらけで、正直てんてこまいでしたが、半年が経過し、少しずつここでの生活にも慣れ、子ども達との関わりを通じながら、多くのことを勉強させてもらっています。

これからも皆様のお力を借りながら、業務に励みたいと思います。よろしくお願いします。

すみれ寮職員　佐々木ほのか

令和7年3月末、初めての異動で会議室に呼ばれた際、心臓が早鐘を打ったのを覚えています。総括から告げられた「次の異動先はさわらび学園です」という言葉に、頭の中は疑問符でいっぱいになりました。さらに「齋藤先生」と呼ばれる職場だと聞き、まさか自分が先生になるとは予想外でした。

たしか異動希望には「スポーツ関係の業務」「防災・災害業務」と記載したものの、事務職員の異動希望はなかなか通らないものだと思いながら、新生活の準備を進めました。さわらび学園での勤務が始まると、驚きの連続でした。児童対応、野球指導、畑での農業など、前職とは全く異なる業務に戸惑い、独自のルールを理解することに苦労しました。

しかし、振り返ってみると、職員チームのピッチャーとして児童との壮行試合に登板したり、児童の緊急対応にあたったりと、希望した業務に携わることができていることに驚いています。「スポーツ関係の業務」と書きましたが、仕事で本格的に野球をすることになるとは想像もしていませんでした。学生時代の野球経験が仕事に生かせることになり、人生何が役立つか分からないものだと改めて感じています。

まだまだ大変なことも多いですが、この経験を糧にこれからも成長していきたいです。

青葉寮職員　齋藤　亮



野外活動

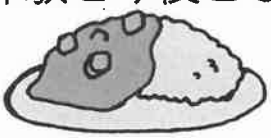


令和7年度は、花山少年自然(1泊2日)の家と松島自然の家(日帰り)で野外活動を行いました。

花山少年自然の家では、沢登りを中心に活動を行い、夜は自分たちで野外炊飯としてカレーライスを作って食べました。山や川での活動を通して、自然と触れ合う喜びを感じることが出来ました。

松島少年自然の家では、いかだ活動と宮戸島ウォークラリーを行いました。初めて作るいかだに苦戦しながらも、グループで知恵を振り絞り、完成させることが出来ました。普段体験することが出来ない海での活動は、仲間と協力することの大切さを学ぶことが出来ました。

どちらも大自然の中で行う貴重な体験であり、多くの学びを得ることが出来ました。子どもたちが大人になった時、思い出してくれるような野外活動でしか出来ない体験を今後とも続けていきたいと思います。



(記:寒河江　優介)



野外活動の振り返り　中学3年K.M

野外活動で楽しかったことが二つあります。

一つ目が、沢での活動です。一日目は、下流での活動で水深は、そんなに深くなかったです。なのでそれなりに体力は使うことなくただ楽しくできました。二日目は、上流でした。上流に行くまでがとても険しく大変でした。絶対に人が通ることができないくらいの斜面があったり、足場の悪い場所を何度も通りました。そして、いざ上流に行ってみたら流れが早く、とても冷たかったです。また、思ったより深く自分の身長でも届きませんでした。でも、その代わりとても楽しかったです。また、沢の中には、魚がたくさん泳いでいました。それを捕まえようとしたら逃げられてしまい、結局無理でした。でも良かったです。

今回の花山は、昨年できなかったことが出来て良かったです。とてもいい思い出になりました。



子ども会活動

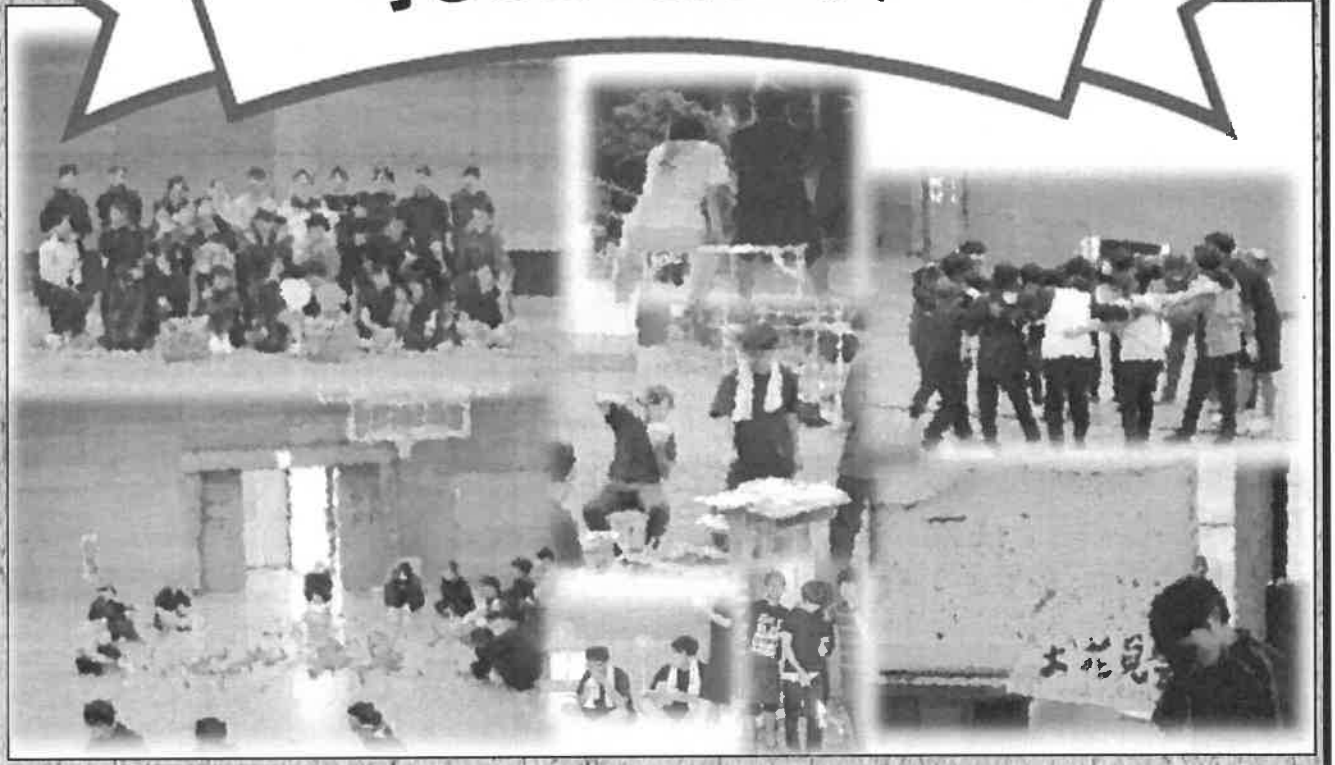


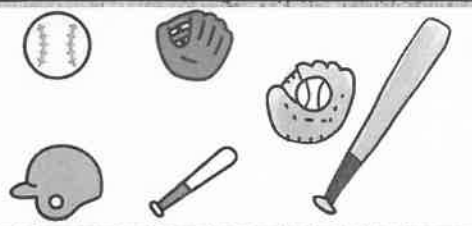
令和七年度の子ども会では、月一回程度(多いときは二・三)の行事を役員の児童と職員が話し合い実施している。

子ども会の新役員児童に伝えるのは、学園の子ども会、学校でいう生徒会であり、他児を動かす存在である、そのため、自分達が他児達の見本にならないといけないということである。子ども会役員はこの言葉を受け年度の目標を設定するのであるが、今年度は、「生活子ども会～ハッピーチルドレン～」を掲げた。この目標は、自分たちが生活から見本となり、その自分たちが考案した行事を通じて仲良くなったり喜び合ったりできるようにしたいという願いが込められている。

活動では、花見、運動会、登山、BBQ、夏祭り…様々な行事が続くが他児からの評価も高く、子ども会役員の児童も充実した運営や企画を行えている。(記:小池　裕也)

子ども会活動ギャラリー





FASカップ



今年度の集大成として臨んだFASカップの結果は、1勝1敗と目標としていた全勝を果たすことはできなかったが、野球部として果たすべき役割を、1人1人の児童が全うした様子だった。今年度の野球部は、「生活野球」と「役割野球」の2つをモットーに取り組んでいる。土台となる毎日の生活を大切にしながら、各ポジションや野球の仕事を担う各々の役割を、尊重し合うチームつくりを意識してきた。

今回のFASカップで新たに中学3年生の2名がピッチャーとして出場したが、登板するために、自由時間中も投球フォームを自分なりに改善したり、野球の本を借りながら学んだりと、普段の練習に加え、自分なりに努力する場面が見られた。他の児童も地区大会や全国大会で習得したことを、今回のFASカップに活かしてプレーすることができており、次世代の児童たちが、次年度の大会に向けて気持ちを高められる貴重な時間となった。(記:三浦　拓人)

FASカップとは、福島県福島学園、山形県朝日学園、宮城県さわらび学園の南東北3県にある児童自立支援施設が毎年、スポーツを通して交流する行事です。行事のなかでは、学園で培った成果を発揮する白熱した試合が繰り広げられます。

今年度、女子は約5年振りにバトミントン部の活動が再開しました。児童も職員も初心者のなかで、他施設との合同練習など工夫をしつつ、少しずつ練習を積み重ねてきました。

今回、福島学園主催のFASカップでは、女児2名が参加しています。半年の練習期間でしたが、多くの試合を通して成果を確認することができました。技術的な面だけではなく、スポーツを通して礼儀や協調性を習得していき、試合でも発揮できたことが非常に立派に感じます。来年度以降も、少しずつバトミントン部の活動を醸成していき、子どもたちの成長につなげていきたいです。

(記:夏谷　朔)



FASカップ 児童作文



バドまとめ　年長生　Y.S

４月からのバドミントン活動では、うまくできるかとか上手になれるのかとかが心配でしたが、うまくできるよりもまずは、あいさつ、返事、応援などの基本的な部分から頑張ろうと思いました。バドミントンのラリーのときは、きそうちドライブとかハイクリア、スマッシュが一番苦手でできてませんでした。そこで5月にあった福島学園との練習でフットワークやラリーの打ち方をおそわりました。最初は、上手くいかないことばかりでしたが練習を重ねるごとうまくできるようになりました。さわらびにもどってからも日々の練習に福島でおそわったフットワークやラリーの打ち方の高いいちでうつことを意識してがんばっていました。一人ですぶりをしたりしてました。FASカップでは練習したきそうちをいかし前にやったり後ろへととおくにとばしたり、プッシュをやったりしてがんばりました。シングルスでは3位という結果がのこりました。たのしくやれました。午後のダブルスでは、にいがたの先生とペアになり、はじめてだったけどあいさつをして自己紹介をしました。「右まもります」といって試合の中で「お願いします」と自分の届かないところにとんできたはねは声がけをしてやりました。ダブルスがおわったあともうしこみ試合でした。何試合かやりました。どれもたのしかったです。他の試合してる人たちのをみながらこういうサーブきたらこうかえそうとイメージしながら見てました。

バドミントン活動をとおして学んだことは、あいさつ、返事、応援です。あいさつ、返事、応援は、最初はずかしくてあまりできてなかったけど試合のはじまるときの「お願いします」おわりの「ありがとうございした」とか「がんばれ」や「ファイト」とかのあいさつ、返事、応援の3つを学びこれからもその3つを続けていきたいです。

学園ギャラリー

